

メディア・文化研究とエスノグラフィー

藤田 結子

筆者はこれまで、メディアと文化を対象にエスノグラフィーを用いた研究を行ってきた。エスノグラフィーとは、基本的には、現場での参与観察を中心とする質的調査法、およびその成果物の民族誌を指す¹。しかし現在では、インタビューやオーラル・ヒストリーなどの質的調査もエスノグラフィーと呼ばれるようになってきている。上記の研究対象と調査法を扱う分野には、文化人類学、社会学、コミュニケーション研究、カルチュラル・スタディーズなどがある。社会学ひとつとっても各国に異なる伝統が存在するが、本稿では筆者が携わってきたアメリカのメディア・文化社会学、コミュニケーション研究、イギリスのカルチュラル・スタディーズに焦点をあて、エスノグラフィーの最近の動向についてレビューを行う。

アメリカ社会学の場合、メディア、文化を対象とする主要な研究は、20世紀前半のシカゴ学派 Robert E. Park らの都市文化研究、1940年代以降のコロンビア学派 Paul Lazarsfeld らのマス・コミュニケーション研究、1970～80年代にかけて台頭した文化社会学 (sociology of culture および cultural sociology) などである。これらのうち参与観察をよく用いるのは、シカゴ学派の都市社会学の流れをくむメディア社会学である。他方、文化社会学の代表的研究は、主に量的手法 (e.g., Peterson 1992,

DiMaggio 1982) やインタビュー (e.g., Lamont 2000, Swidler 2001) を採用してきた。

都市社会学とメディア社会学を横断するエスノグラフィーとして、ニュース制作研究があげられる。これは、調査者が都市に存在するニュース組織に通い、制作過程に参加して観察し、関係者に話を聞く手法を用いる。たとえば、Tuchman (1978) はニューヨークのテレビ局、新聞社、市民活動、市庁舎のプレスルームをフィールドとし、10年以上の参与観察を行った。また、Gans (1979) はCBS、NBC、*Time*、*Newsweek* の編集局で長期にわたって参与観察を行った。これら初期のニュース制作の民族誌が出版されてから30年以上たった2010年代、アメリカではニュース制作の参与観察が再び試みられた。なぜなら、デジタル化によってニュース制作過程が大きく変化したからである。たとえば *The Philadelphia Inquirer* (Anderson 2013) や *The New York Times* (Usher 2014) を対象とした研究があげられる (藤田 2018)。

また深刻化する格差や人種主義の現状から、都市の若者とデジタル技術を主題とするエスノグラフィーが登場している。対面の現場だけでなく、ソーシャルメディア上でも参与観察が行われている。Lane (2019) は、スマホやソーシャルメディアが、ニューヨーク・ハーレムの若者のアイデンティティ形成や自己表現、相互行為

にもたらした影響を分析した。また、Stuart (2020) はシカゴのギャングとラップ音楽、貧困と暴力、ソーシャルメディアの関係を明らかにした。このようにアメリカ社会学では、デジタル技術を焦点とするエスノグラフィーが次々と出版され、高い評価を得ている。

その一方で、アメリカのコミュニケーション研究は、Lazarsfeld などコロンビア学派の社会学を1つの源流とし、1980年代までに社会学とは別の学際的な研究教育組織であるコミュニケーション学科・学部へと制度的に発展していった² (Eadie 2008)。この系譜上、アメリカのコミュニケーション研究は量的研究を中心に展開してきた。しかし若い世代の研究者たちは、イギリスのカルチュラル・スタディーズの影響を受け、以前よりもエスノグラフィーを採用するようになってきている。たとえば、Marwick (2013) は、アメリカ・シリコンバレーのテクノロジー業界の参与観察を行い、業界の男性たちが階層や人種によって成功の可能性が大きく異なっていることを明らかにした。また、Duffy はインタビューや参与観察を用いて、インフルエンサーの労働を明らかにした。女性が男性と比較して、より困難な経済的状況や社会的制約に直面しやすいことを示した (Duffy 2017)。

上記の研究に影響を与えたイギリスのカルチュラル・スタディーズは、よく知られているように、オーディエンス、サブカルチャー、ファンダムなどを対象に、アメリカの実証主義的なコミュニケーション研究を批判しつつ、エスノグラフィーを採用してきた (藤田 2018)。そして、2000年代以降のカルチュラル・スタディー

ズには、トランスナショナルな文化やアイデンティティ、情動やクリエイティブ産業など特徴的な研究テーマがみられる (e.g., McRobbie, Strutt and Bandinelli 2023)。だが、現在イギリスの大学で開講されているカルチュラル・スタディーズの授業を概観すると、テキストにはメディア技術、人種・ジェンダー、若者と音楽など、イギリスの社会学やメディア研究と重なるテーマが並んでいる。主要な研究組織も統廃合され、他分野との境界がより曖昧になっている³。同分野の主要学術誌の寄稿者・研究対象も国際的であり、もはや “British cultural studies” というカテゴリーを用いてエスノグラフィーを分類することは難しいだろう。

最後に、エスノグラフィーという調査法の動向について触れておきたい。上述のように、米英では、若手のエスノグラファーたちが今日の課題に果敢に挑戦してきた。そして、エスノグラフィーという手法自体にも、新しい流れが起きている。1980年代の『文化を書く』による危機以降、アメリカ社会学では、2010年代の『逃亡者の社会学』(2014=2021)をめぐる騒動、スマホやソーシャルメディアなど技術の発展・普及から、エスノグラフィーがあらたな「試練」に直面している。社会科学に対する不信が強まる中、データの透明性、研究の再現性を求める声が高まっているのである。エスノグラフィーに関しても、匿名化を最小限にし、現場を小型携帯機器で録音・録画し、データを共有することが推奨されている (Murphy, Jerolmack and Smith 2021)。さらに、日常生活でオンラインの場面が増えたため、あらゆる研究テーマにおいてオンライン上の人びとの行為

を追跡する必要性、それを対面の現場における エスノグラフィーに統合していく必要性が指摘 されている。今後、方法論に関する議論がいつ そう重ねられていくだろう。

註

- ¹ 本稿では字数制約から、伝統的なエスノグラフィー、すなわち対面の現場での参与観察を用いた研究に焦点をあてレビューを行う。2000年代以降、オンライン上のコミュニティで参与観察を行うエスノグラフィーの方法についても活発に議論が重ねられている。
- ² アメリカ社会学会には、Communication, Information Technologies, and Media Sociology という部門があり、ここに属する社会学者はアメリカのコミュニケーション研究の主要な学会である International Communication Association (ICA)、National Communication Association (NCA) に属する研究者と重なっているといわれている。
- ³ イギリスでは cultural sociology と cultural studies の垣根が低い。一方で、アメリカの cultural sociology とイギリスの cultural studies の境界は明確に引かれている。欧米では cultural sociology が分野として拡大しつつあるという (Thorpe and Inglis 2022)。

参考文献

- Anderson, C. W. (2013) *Rebuilding the News: Metropolitan Journalism in the Digital Age*, Temple University.
- DiMaggio, P. (1982) "Cultural Capital and School Success: The Impact of Status Culture Participation on the Grades of U.S. High School Students," *American Sociological Review*, 47(2): 189-201.
- Duffy, B. E. (2017) (Not) *Getting Paid to Do What You Love: Gender, Social Media, and Aspirational Work*, New Haven; London: Yale University Press.
- Eadie, W. F. (2008) "Communication as an Academic Field: USA and Canada," *The International Encyclopedia of Communication*.
- 藤田結子 (2018) 「グローバリゼーションをいかに記述するのかーニュース制作とオーディエンスのエスノグラフィーを中心に」(特集 メディア研究・ジャーナリズム研究における質的研究法の現在) 『マス・コミュニケーション研究』 93: 5-16.
- Gans, H. J. (1980) *Deciding What's News*, Vintage Books.
- Goffman, A. (2014) *On the Run: Fugitive Life in an American City*, The University of Chicago Press [= 二文字屋脩・岸下卓史訳『逃亡者の社会学』 亜紀書房, 2021].
- Lamont, M. (2000) *The Dignity of Working Men: Morality and the Boundaries of Race, Class, and Immigration*, New York, N.Y. Cambridge, Mass.: Russell Sage Foundation; Harvard University Press.
- Lane, J. (2019) *The Digital Street*, New York: Oxford University Press.
- Marwick, A. E. (2013) *Status Update: Celebrity, Publicity, and Branding in the Social Media Age*, New Haven: Yale University Press.
- McRobbie, A. D. Strutt and C. Bandinelli (2023) *Fashion as Creative Economy: Microenterprises in London, Berlin and Milan*. Cambridge, UK: Polity Press.
- Murphy, A. K., C. Jerolmack and D. Smith (2021) "Ethnography, Data Transparency, and the Information Age," *Annual Review of Sociology*, 47(1):41-61.
- Peterson, R. A. (1992) "Understanding Audience Segmentation: From Elite and Mass to Omnivore and Univore," *Poetics*, 21: 243-58.
- Stuart, F. (2020) *Ballad of the Bullet: Gangs, Drill Music, and the Power of Online Infamy*, Princeton; Oxford: Princeton University Press.
- Swidler, A. (2001) *Talk of Love: How Culture Matters*, Chicago: University of Chicago Press.
- Thorpe, C. and D. Inglis (2022) "What's up with Cultural Sociology? From Bourdieu and the Mainstream to 'Productive Weirdness'," *Cultural Sociology*, 16(3):318-37.
- Tuchman, G. (1978) *Making News: A Study in the Construction of Reality*, New York: Free Press.
- Usher, N. (2014) *Making News at The New York Times*, University of Michigan Press.



藤田 結子（ふじた・ゆいこ）

[専門] 社会学（メディア・文化）、コミュニケーション研究、エスノグラフィー論

[主たる著書・論文]

Fujita, Y. (2009) *Cultural Migrants from Japan: Youth, Media, and Migration in New York and London*, Rowman & Littlefield.

藤田結子・北村文編（2013）『ワードマップ 現代エスノグラフィー—新しいフィールドワークの理論と実践』新曜社

Fujita, Y. and K. Takahashi (2022) "Digital Media and Diasporic Nationalism," Y. Kim ed., *Media in Asia: Global, Digital, Gendered and Mobile*, Routledge.

[現在の所属] 情報学環

[所属学会] 日本社会学会、日本メディア学会、International Communication Association